

# 夕張を立ち枯れさせるのか

山内亮史

ない地点に追い込まれている。

予想されたこととはいえ、夕張は立ち枯れてゆくのが現実になりつつある。このままで…。先月、北海道自治体学会の主催で開かれたシンポジウムに参加した際の重い感想である。シンポジストの藤倉肇市長・夕張医療センターの村上智彦理事長・夕張再生会議の園泰子さん（夕張子ども文化の会）の三人からは、ほんとうにホンネで今の考えを述べていただきたい。三五三億円を一八年間で返済するというのが夕張に課された財政再建計画である。

どう考へても不可能な計画であつた。三年前、私は、これ後に続く膨大な早期健全化基準のボーダー線上にいる「いくつもの夕張」候補市町村への「見せしめ処分」に他ならないと押さえたものであつた。たしかに、中田鉄治市長の下の市政運営は乱脈なものであつた。多少とも都市経営の基本、地方財政の要諦を考えれば、かくも無惨な破綻はあり得ないことがあつた。私はかつて中田市長に二度会つたことがあつた。その時の印象は今も変わらない。紛うことなき愛郷心の發露を思わせる情熱的な自己のヴィジョンの発信力と、いささか「大風呂敷」を感じさせる政治家らしいアバウトさであつた。

この印象は、急激に進んだエネルギー革命の中で、観光に活路を見出さんとした信念で

あり、そのためには、横路孝弘氏を代表とする夕張ゆかりの政治家を使って、次々と国や道の過渡期の補助金、特別振興措置を引き出して走る拡張路線の姿である。驚くのは、ここで政と官の側の誰一人として、右肩上がりの時代認識を疑いながら、いわゆる「内発的発展」に基盤を置く適正規模の夕張像を描いていないことである。したがつて、現藤倉市長がもう口癖になつてゐる二つのセリフは圧倒的に説得力がある。曰く、「夕張だけの責任なのか!」二〇年一〇〇億が限界だ。

この藤倉市長は、私との名刺交換で、「私は商人だから、ケンカが目的でない。華々しくなくとも、とにかく実をとるのさ」といつた。これはプラグマティズムとしての政治の真髄を言い当てる。私はこの人は「揺れても揺れない」と見た。事実、あまり建設的ともいえない商工会議所の振興策であつた放射性廃棄物・産業廃棄物処分場誘致、カジノ誘致、自衛隊の対テロ市街戦訓練施設誘致等々、いわゆる迷惑施設誘致に対しても最終的に反対を表明している。

一方、村上智彦氏のいわゆる「村上スキーム」は、その総合的地域医療ヴィジョンを示す「夕張希望の杜」という名とは裏腹に、今まで撤退も視野に入れた決断をしなければならぬからだ。